

主任コラム9月号

主任 澤井 良子

9月に入りましたが、まだまだ暑い日が続いています。今週には年長児にしか出来ない行事『お泊り保育』があります。初めてがいっぱいの中で、より一層年長児が成長した姿がみられたらいいなと思っています。

先月の出来事です。こくら組で給食後の掃除を年長児がしてくれているのですが、机を拭いた後に椅子を机の上にあげ、床に落ちた食べ物を拾ってから床拭きをしてくれています。その時にMちゃんが「これさ、いつも拾うのが大変だから、もうちょっと落とさないようにみんな食べてくれないかな」と呟いていました。年長児が床拭きをしている時には年中、年少児は午睡の部屋に移動をしているので年長さんの思いを知らない子が多いと思います。私は「そうよね。そのMちゃんが思ったことを年中さんや、年少さんに朝の集まりとかで伝えてみたらどうかな？」と話をしました。職員からではなく子ども達を感じた事を、子どもから子どもへ伝えたほうが思いは伝わるのではないかと感じました。保育や色々な事に、子どもの意見や思いを聞き参画していければ、子ども達主導で保育が展開されていくのではないかと私は思います。子ども達のことば・呟きにはたくさんの思いや不思議に感じていることがあふれています。大人が主導でなく子ども達の思いを引き出し、実現し楽しみ、その時にあった発達場（環境）を用意することが大事ではないかと思えます。

そして2歳児クラスでは、プール前の着替えの時間に着脱しにくいところを保育士ではなく、子ども同士で手伝いながら着るという場面をみかけました。ただ「先生できやん」と呼ぶのではなく、子ども同士で、その子の難しいと感じているだろうところに気が付き手伝う（ジップ上げなど）ところが、2歳児ならではの姿「同僚性」の部分が育っているのだな・・・と感じました。2歳児の担任の日誌の中にも「保育士が援助しすぎてしまう所をぐっところえ見守っていきたい」という内容がありました。日頃の保育の中でも保育士が、手を出し過ぎず子どもの事を見守っているからこのようなやりとりがあるのだろうな・・・と感じました。

また、4歳児の子の女の子数人が午睡前に3歳児をトイレに誘ってくれています。保育士が誘うと嫌がる子も、なぜだかお姉ちゃんが誘うとすんなりに行く子も多く、年中児がマグネットを動かして「〇〇ちゃんは、もう来たから大丈夫。〇〇ちゃんがきてないから声かけてこよかな？」とお手伝いをしてくれています。そして、下着を履くときにパンツを足が通しやすいように履かせてあげようとするのではなく、年少さんの女の子のワンピースをまくってあげて自分でパンツを履けるように見守る姿にはびっくりしました。4歳児でも、どういうふうにしたら自分でできるのかを考えて援助できるという力が毎日のお手伝いの中でその子自身で気が付いたことなのだろうなと感じました。

毎日の保育の中での子ども達の意欲的なお手伝いでは「やりたい」「頼られたい」「誰かの助けになりたい」という事が育むことが感じられるように保育していきたいと思っています。

